



Human Focus

## レーザー加工技術の付加価値向上へ



**(株)レーザックス 代表取締役社長 近藤大祐 氏**

レーザックスはレーザージョブショップの老舗として、その確かな加工技術によって業界での確固たる地位を築き上げてきた。代々受け継がれる技術力とノウハウは時代の変化とともに磨き上げられている。今回同社代表取締役社長の近藤大祐氏に事業の強みや経営ビジョンなどについて話を聞いた。



近藤大祐（コンドウ ダイスケ）41歳

2014年 上海交通大学医学院卒業  
中国の医師免許取得  
2016年 (株)レーザックス入社  
2016年 中西電機工業(株)出向  
2022年 (株)レーザックス代表取締役社長就任

## レーザージョブショップとして発展

### —御社の歩みについてお聞かせください

1941年に私の祖父、近藤栄二が戦闘機（ゼロ戦）のエンジンなどを製造するメーカーで知られる中島飛行機半田工場の協力会社として、近藤航空機製作所を創業したのが始まりです。1946年には鋳物を手掛ける丸真製作所が設立され、1965年に精密機械の設計・製作メーカーとして丸真精機が設立されました。

後に丸真製作所は丸真重工へと社名が変わりますが、ここにレーザカッティングセンターを設置したのが1984年です。当時導入したのは炭酸ガスレーザー加工機です。ここから本格的にレーザー加工事業がスタートしました。1988年にレーザカッティングセンターが独立して設立されたのが、レーザックスです。

拠点はここ本社工場と横浜のレーザテクニカルセンターがあります。自動車産業が集積しているエリアでもあるので、レーザー発振器メーカーさんもラボやサービス拠点を置かれていて連携したりしています。会社としては創業から今年で84年目、レーザー加工事業を開始してからは41年目を迎えました。

### —御社の事業の強みは？

弊社の事業の柱は3つあります。レーザー受託加工事業、レーザー加工周辺機器の設計製造販売事業、工作機械向鋳物部品材料の調達販売事業です。

レーザー受託加工事業は先ほども紹介いたしました。1984年に日本国内でいち早くレーザー加工機を導入してレーザー加工分野に参入しました。以来40年間、多様なレーザー加工設備を保有し、さらに長年蓄積・継承してきた技術力とノウハウで、半導体、自動車、医療、航空宇宙など様々な分野のニーズに対応しています。

現在、特化しているのは溶接技術ですが、航空・宇宙分野に関しては、航空宇宙業界の国際認証Nadcapを取得しているのも強みでして、これを活かした穴あけなどの加工にも力を入れています。

また、受託加工では中量産のものづくりに加え、試作加工やレーザー加工試験に強みを持っており、お客様のものづくりに深く寄り添い、製品作りにより高い付加価値を与え、お客様の要求仕様を確実に満たすことを目指しています。

レーザー周辺機器事業は、レーザー受託加工事業で多くのお客様とともに無数のレーザー加工を行ってきた、その豊富な経験とノウハウをベースに、お客様の用途に適したレーザー加工装置の提案を進め、最適な機器の設計製造や機器の選定をすることで、お客様がレーザー加工できる生産設備の導入支援をしています。

具体的にはレーザー光を照射するレーザー加工ヘッドを主力商品とし、レーザー光を制御するコントローラーや溶接機を販売しています。繰り返しになりますが、私たちの強みは、加工ノウハウをベースにした、カスタマイズ設計で、お客様のニーズをくみ取り、ノウハウをベースとして提案を行なうことで、お客様にとって最適な機器を設計・製作できることです。これらの事業を上手く回しているのが、我々のビジネスモデルとなっています。

## 代表取締役就任と『OPTICEL』ブランドの確立

### —代表取締役社長に就任された時期は？

父から受け継ぎ、社長の職に就いたのは2022年です。私かというと、専門は医学でして日本では放射線医療を

学びました。それから中国語を一年間猛勉強して、上海交通大学医学院に入学。中国で医師免許を取得しました。そのまま中国で医師の道へと進むことも考えましたが、小さい頃から慣れ親しんだ鋳物やレーザーをやりたいと思い、家業を継ぐ決断をしました。

社会人経験がないので、以前から大変親しい関係の中西電機工業(株)で産業用向け制御装置の営業を行ない、1年間修行をさせていただきました。そして、レーザックスに戻り、経営とレーザー技術について学んでいきました。よりレーザー技術を深く理解するために光産業創成大学院大学（以下、光創成大）にも入学しまして、現在も通っています。

医学の経験を活かしたということでは、光創成大で知り合いました浜松医科大学の中川雅裕先生の事業のお手伝いをさせていただいたことです。何かというと、レーザーを用いたリンパ管再生手術システムにおけるレーザー加工ヘッドの開発です。事業化の段階までには至りませんでした。これは良い経験でした。

また、これは5年前に終了したプロジェクトなのですが、(株)RYODENと信州大学と共同で、フェムト秒レーザーを活用した撥水加工技術の開発も行ないました。製品の性能向上や環境負荷低減という観点から、素材の表面に機能的なテクスチャを施す加工法があります。我々が取り組んだのは照射角度が限定されていた従来の加工法（順テーパ加工）ではなく、照射角度を制御できる逆テーパ加工制御技術の開発です。

#### —御社独自の製品について教えてください

弊社では『OPTICEL』ブランドとして製品をラインナップしています。先ほどの事業の強みでも紹介しましたが、これまで請け負ってきた加工から独自のブランディングビジネスに転換させることを狙ったものです。まずはレーザー加工ヘッド。軽量・コンパクトであるのが売りの一つですが、最近では銅加工が増えてきており、高出力可視光レーザーと近赤外線（IR）レーザーを組み合わせたハイブリッドレーザーの開発も進んでいます。これに対応した加工ヘッドを製品化しました。この加工ヘッドにはより高い加工品質を実現するため、レーザービームを回転させるワプリング機能も搭載されています。



溶接機としましては、ハンドトーチ型ファイバーレーザー溶接機を『OPTICEL FHシリーズ』として製品化しています。ステンレス系やアルミなどの材料毎に応じた溶接機をラインナップしています。ボタンを押すだけでトーチからレーザー光が出射するというもので、手持ちで溶接を可能にする装置です。

ただし、この溶接機の普及に向けては課題があります。それは安全性を担保するということです。現在、中国製のハンドトーチ型溶接機が数多く市場に出回っていますが、その大半は誤照射などを防止するインターロック機構が搭載されていないようです。

この溶接機を動作させるためには、必ず保護・遮光メガネをつける必要があります。作動・停止させるためのフットペダルなども搭載する必要があります。保護メガネの装着有無は、センサーによって認識されるので、当然ながら付けていなければ溶接機は作動しません。

実はいま、日本溶接協会のLMP委員会（レーザー加工技術研究委員会）でインターロック機構がない製品が出回っていることが問題視され、安全に関する規格づくりが進んでいます。私はこの委員会の幹事として参画しているのですが、実際の使い方や安全周知のための講習会の実施も考えられています。

#### 経営ビジョンと成長戦略

—経営ビジョンと今後の成長戦略についてお聞かせください

弊社は「社員を一番に考える」ことを重視し、2031年



の創業90周年に向けて「ビジョン2031」を掲げています。その柱として、「レーザー加工・鋳物で最初に選ばれる企業を目指す」、「最新技術によって社員と社会をワクワクさせる」、「社員全員が幸せを感じる会社を作る」の3つを示しました。

現在は売上規模が30億円ほどですが、将来的には50億円、100億円へと拡大することを目標としています。売上拡大の戦略として、付加価値の高い仕事を見つけることや、新たな業界へ進出することが挙げられます。そのためには設備の増強も考えなければなりませんし、最新技術の活用にも積極的に取り組んでいきます。また、今年の11月に完成予定ですが、現在建設中の新棟にラボを設置して、産学共同研究を行ない、より高精度な加工技術の開発を進める計画にしています。これによって技術の付加価値向上へとつなげていきたいと考えています。

経営においては、「社員を大切にする」ことを最も重要視しています。そのためには、企業の利益確保が不可欠であり、新しい技術の開発を通じて、社員と社会にワ

クワクを提供することを使命としています。

また、先代が掲げた「社員が幸せを感じる会社にする」という理念を継承しつつ、「人から頼られることが幸せである」という信念を持ち、社員に対しては「仕事を通じて頼られる存在になってほしい」と願っています。

#### —レーザー業界の将来性は？

レーザーを利用している会社が非常に多くなってきました。しかし、まだまだレーザーを広げられると感じています。そのためにはレーザーがどういうものであるかというのを伝えていく必要があると思いますし、既に使っている会社に対しては、こういうこともできるという提案をしていくことができればと思っています。その意味で、レーザー業界はまだまだ伸びていくと思います。レーザーといえばレーザーックス、と呼ばれるよう頑張っています。

#### —趣味や余暇の過ごし方は？

趣味は筋力トレーニングで重いものを持ち上げることが大好きです。パワーリフティングという競技をしています。パワーリフティングとは体重別にスクワット、ベンチプレス、デッドリフトの重量を競うスポーツです。2018年は愛知県で開催された競技で66 kg級に出場し、優勝しており、福井国体に参加しました。2019年にはつくば国体にも参加しています。最近は取引先の人と筋トレを一緒にするようになりました。仕事にもつながるので一石二鳥です（笑）。

（聞き手：三島滋弘，PHOTO：野口葉奈）

#### 記者の目

本社工場内で一際大きく目立っていたレーザー加工機があった。それはイタリアのPrimaPower社製のもので、インタビュー中に出てくるNadcap認証に対応する加工が可能な主力設備となっている。将来的にこの加工機をさらに数台導入したいと語る近藤社長の今後の経営手腕に注目していきたい。

※本インタビューをフルで読みたい方はWEBジャーナル「OPTRONICS ONLINE」へアクセスください。

